

おしいれ考 —住宅における隠す空間の史的比較を通して—

建築デザイン分野 A02T321 坂東真以

1. 研究の背景と目的

おしいれ¹⁾は収納するところとして住宅の中にある。しかしながら、そのような物を収納する場所に罰として人を入れるなどの例があるのは興味深い。この原因は歴史的考察から導き出されるのではないだろうか。本研究の目的は収納空間に含まれる様々な意味機能を分析し、おしいれに新たな視点を与えることである。

2. 研究の方法

ここで本研究の方法を提示する。おしいれは物を収納する機能がある反面、通常でないがゆえに罰として人を入れる場合がある(特にこどもに行われる)。そこで、おしいれの住宅における位置づけを図に示す。ここでは、

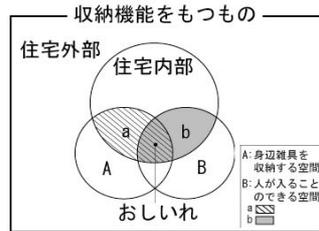


図1: おしいれの位置づけ

収納機能をもつものを前提として扱う。おしいれは収納場所であることから「周辺雑具を収納する空間」(A)に含まれる。また、時に罰として人を入れる例があることから「人が(場合によっては)入ることのできる空間」(B)にも含まれると考える。よって本研究はこの二つの視点からおしいれの特性を導き出すこととする。

まず、(A)・(B)の史実例を用い、これまでの研究による解釈を追って、それぞれの特性を明らかにする。ここでは具体的に、(A)は棚などの家具類、(B)は、納戸・塗籠を挙げる。

3. 周辺雑具を収納する空間 (a)

ここでは、実例を用いながら周辺雑具を収納する空間の特性を明らかにする。以下具体的に、棚・戸棚・部屋戸棚・厨子を挙げる。

■棚

わが国で発祥した「棚」は、『古事記』によると²⁾、上古の棚には、棚机・高棚(釣棚)・倉棚(雑具や武器を納めた)などがあったとされる。棚が中世の絵巻物にしばしば登場することから、実用的なものには棚が用いられたことは平安時代になってもさほど変わらないことを窺いしることができる。

■戸棚

棚のまわりを板で囲み、正面に遣戸をつけたものが戸棚である。戸棚は板材の生産量が増加し、入手しやすくなった江戸時代になって、発展したものであると言われる。主に関西で戸棚屋が発達し、厨房の戸棚が早くに発達したと言われるが、それは食品の保存に埃などから防止する役割があったからだと考えられる。

■部屋戸棚と押込み

戸棚が一般的に普及し、居間用の戸棚が使用されるようになる。部屋戸棚や押込みとよばれたのがその居間戸棚の例である³⁾。しかし後に戸棚はつくりつけが多くなった。この他、蒲団の普及につれて明治中期頃になると蒲団専用の押入れがつくられるようになったという説も

ある。これも後になると完全につくりつけになるが最初は置押入れで、形も一定せずいろいろあった⁴⁾。また、それらの道具が次第につくりつけとなって、住宅の一部に位置づいていったものがある。これを部屋戸棚という。このとき、この作り付け戸棚には、貴重品などを納める例があった。

■厨子

奈良時代頃、中国から入ってきた家具である。両開扉のついた戸棚と受け取られ、観音開きの仏龕(ぶつがん)⁵⁾も厨子と呼ばれるようになったとされる。現存するものをみると仏龕は仏壇を納める場所として寺院にあったと窺える⁶⁾。しかし住宅においては実用的な周辺雑具の収納家具に用いられた。

■まとめ

これらの道具を見ると、どの収納家具を見ても、住宅においては物の収納することが第一義であったことが分かった。仏龕としての厨子も住宅においてはその形態のみを継承し、実用品などを納めることに終始していたと考えられる。

さらに時代を下ると、それらの道具が次第につくりつけとなって、住宅の一部に位置づいていったものがあることが分かる。おしいれもこの一例で、収納する道具としてあることを確認した。

このとき、この作り付け家具には、貴重品などを納める例があった。つまり、住宅においてつくりつけになることでより、堅固な収納部分となったのではないだろうか。

4. 人が入ることのできる空間 (b)

ここでは、収納機能をもつもののうち、人が入ることのできる空間の特性を、実例を挙げて明らかにする。史実例として、納戸・塗籠を挙げる。

4.1 納戸考

■納戸のつくりと機能

まず、納戸を描いていると思われる図2、3の二つの絵巻物を見る⁷⁾。すると両方において、壁は土壁もしくは板壁で囲われている様子が見える。窓は見られず、囲われた閉鎖的な部屋であったと窺える。また図2では鞍や傘などを納めている様子、図3では畳が敷いてあり、枕が置いてある様子がみえる。ここから、納戸には二つの機能、つまり収納と寝所としての機能があることが確認できた。



図2: 出典『慕帰絵』巻2
「摂津国原殿の前大僧正信昭の
僧房」



図3: 出典『慕帰絵』巻8
「竹杖庵」より

■民家における納戸

納戸に収納以外に寝所としての機能があることは、民家における習俗からも良く分かる。民家において寝所の主流が納戸であったことは、柳田国男の民俗学調査⁸などからも分かる。さらに、これらをよく示すような興味深い実際の就寝習俗を柳田が取り上げている。納戸では、藁や初穀などを床いっぱい敷きつめて寝ていたのである⁹。また、農業で成り立っていた民家においては、納戸に神を祀っていた¹⁰。また、キリスト教徒が隠れて信仰するため¹¹に、納戸神の習俗に習って、密かに信仰することができた。この時、納戸は隠す機能をもっていたと考えられる。

■まとめ

納戸の性質をまとめると、納戸には一般的に認識される収納機能の他、寝所としての機能や、神を祀り隠すことで神を成立させる機能があることが確認できた。

4.2 塗籠考

次にさらなる実例として、塗籠を挙げる。

■寝殿造の塗籠

中世の貴族住宅である寝殿造は、葺戸¹²や引違障子(襖)の発達が特徴的である¹³。空間分節がまだ定着することのなかった寝殿造は開放性を備えていたといえる。その中で唯一閉鎖的といえる場所が塗籠である。塗籠は、寝殿造における部屋の一つである。寝殿造の寝殿や対屋において、母屋の一端を区切って周囲の壁を塗り込めた寝室とされる。

■神聖な塗籠

清涼殿において塗籠は天皇の寝所とされ(夜御殿)¹⁴、そればかりか天皇は剣璽に見まもられながら、夜御殿で崩御するのが理想とされ、それが無理な場合でも、天皇の遺骸はまず夜御殿に移されたのであった。このように、塗籠は古来から、大殿籠(おほのごもり)をするための神聖で不可侵の場とみなされていたのであった¹⁵。また、その構造の特性を利用して、塗籠は先祖伝来の宝物類や形見の品々を保管する場であり、塗籠に身を隠すことは、外部世界との交渉を断って邪気や邪霊を払いのけ、これらの品々に宿る神霊と交わって生気を取り戻す機会であったとされる例がある¹⁶。

■まとめ

ここでは納戸・塗籠の空間特性を確認した。これより、納戸と塗籠には類似性があり、機能的にその意を同じにしていたといえる。従って、収納空間に生活が入る空間は共通して三つの機能を担っていたことがわかる。一) 収納二) 寝所三) 神や神聖なものを納める機能である。

5. 物への変換とおしいれの特性

まず、物を収納する機能のみを持つものの視点からおしいれを捉えるため、棚などの家具の例を扱った。これらは住宅においては単純に物を収納する機能を持っている。その中で厨子という外来のものがあつた。厨子は中国から入ってきたもので、仏龕として利用されていた例があつた。これは寺院における厨子に見られる。ところが、住宅において厨子が用いられる例をみると、仏龕としてではなく身辺雑具を納めていた。このことから住宅において厨子は、同じ形態を持ちながら仏龕としての機能は持たなかったことが分かった。この例に示唆されるように、住宅における収納機能として作られるおしいれは、身辺道具を納めることを前提に作られていたと考えられる。

次に、収納空間に人が実際に入っていた実例として納戸

と塗籠の特性を明らかにした。納戸及び塗籠にはまったく位相の違うように思える物(一)物(二)寝る人(三)神・神聖なものの三種類が入っていたことが分かった。

(一)物は収納の対象となる。(二)納戸・塗籠は寝る行為を行う場所でもある。寝ているとき、人には主体性がなくなっている。この意味で人を物と見なすことができるのではないか。つまり、納戸・塗籠が人を物として収納する機能を持っており、言い換えれば人が物になれるところとして確保している空間であると考えられる。ゆえに、納戸・塗籠では性行為、出産や人が死ぬという非日常的な行為も行われたりするのではないだろうか。

(三)納戸・塗籠が、神霊と交わる空間であったという例より、人が神と一緒にになれる空間であったと捉えることができる。これは(二)と同様に、人が主体性を失ったときにおいて可能なことであったと考えられる。以上を踏まえ、おしいれの特性を述べる。おしいれは物を収納するところを前提として壁の中に埋め込まれ、その前面を襖で区切ることによってできた空間である。この閉鎖的な空間という点で納戸・塗籠と類似している。ゆえに、おしいれには納戸・塗籠のように人がはいる空間のイメージが付加される場合もあると考える。しかし、おしいれは人が入ることを前提としては作られていない。よって、おしいれは納戸・塗籠のように人が物になれるところとして確保されている空間ではない。したがって、おしいれに人が意図的に入れられると、物にされるという恐れが生じ、罰として成立すると考えられる。

6. 結論

本研究は、住宅における収納空間に関する二つの視点から比較検討を行った。これより、おしいれの特性の一つを考察することができた。

¹『広辞苑』で、「おしいれ【押入れ】和室で、ふすまや戸で仕切り家財・寝具などを入れておく所。」とされ、収納場所であるといった認識は一般的であると考えられる。²柳田は民家の納戸について、「主人夫婦の休む部屋に限るものが多いが後には単なる寝所のことになって、幾つもの納戸をもつて居る家もある。」と述べており、民家の寝所は納戸が主流であったことが窺える。

³712年 日本最古の歴史書『古事記』の他に『令義解』『延喜式』でもいわれている。

⁴大抵は上下二段に分かれて、上は襖戸、下は舞良戸になっていた。上には蒲団や衣類を入れ、下には行李や菖籠の他、金庫代りの小形の箆笥や懸硯などを入れたといわれている。

⁵間口半間、一間、片開戸のついたもの、突上げ戸式になっているもの引違戸のもの、上下二段になっているものなどが一般的な形で、蒲団戸棚はほとんどが杉などの板戸でごく質素なものであった。

⁶仏像などを入れる厨子。仏壇。

⁷現存する仏龕としては、飛鳥時代の法隆寺の玉虫厨子や、白鳳時代の橋夫人持仏厨子がある。書物・経巻・什器(日常使用の家具・道具)などを入れる厨子としては、法隆寺の竹厨子が最も古く、正倉院の赤漆文庫木厨子などがある。

⁸『図説 日本住宅の歴史』『絵巻物の建築を讀む』などで取りあげられる。

⁹柳田は民家の納戸について、「主人夫婦の休む部屋に限るものが多いが後には単なる寝所のことになって、幾つもの納戸をもつて居る家もある。」と述べており、民家の寝所は納戸が主流であったことが窺える。

¹⁰柳田国男『明治大正史 世相篇』朝日新聞社、1931年『定本柳田国男集』第24巻、筑摩書房、1970年、に収録)藁や初穀は湿気を防ぎ、綿などの利用をされる以前には、それだけで十分に寝具のかわりをつとめ、藁の下には初穀を二、三尺の厚さに積んでいたという。

¹¹石塚尊俊「納戸神をめぐる問題」『日本民俗学』二巻二号、1954年)納戸を祭場として田の神や歳の神を祀り、期日を定めて餅や御神酒(おみき)などを供える信仰が、西日本にはとくに発達している。中国地方には正月に種初(のち)の米俵を納戸に祀り、さらにこの米俵を御神体(みたま)にみて供え物をささげたりする風習がある。

¹²キリスト教が1549年に伝来して以来、仏教が主要であった日本においても宗教となっていた。ところが、豊臣秀吉が1587年バレンティン追放令を出したのを初めとして、江戸幕府は1612年に禁教令を出したため、キリスト教徒は隠れキリストンとなってひそかに信仰し続けた。片岡弥吉「かくれキリストン—歴史と民俗—」(NHKブックス)五六

¹³格子は格子戸のことで部(戸)の形式。部とは格子の間に板を入れるか、格子の裏に板を打ちつけた上、下に分かれた戸のことで、多くは下を固定し、上蓋は古くは室外側に、新しくは室内側に水平に跳ね上げて掛金で吊る。(

¹⁴(福垣 栄三・国史大辞典)参考文献:太田静六『東三条殿の研究』(『建築学論文集』二一・二六)福山敏男『寝殿造の祖形と中国住宅』(『月刊文化財』二〇一)川本重雄『東三条殿と儀式』(『日本建築学会論文報告集』二八六)

¹⁵夜御殿には天皇家に伝わる宝剣と神璽の曲玉が安置され、灯火の火が絶やすことなく燃やされていた。これらの剣璽の靈力にふれて夜をすごすことは天皇だけにゆるされた資格であり、同輩に責務だったのである。(太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 昭和62年)

¹⁶かぐや姫の例も塗籠にこもるのは、単に堅固な建築構造のためだけではなく、このように神聖な場所とされていたからだと考えられている。

¹⁷佐藤吉司『建築をとおしてみた日本』(『海と列島文化』第10巻)小学館 1992年所収)